



学校だより

令和4年11月30日

ひびき 12月号

昭和54年3月3日制定

横浜市立獅子ヶ谷小学校

みんなちがって、みんないい

校長 大塩 啓介

表題の言葉は、皆さんご存知のように、詩人金子みすゞの「わたしと 小鳥と 鈴と」の中の一節です。最近、この言葉が改めて脚光を浴びています。様々な人の存在を認め、「こうあるべき」という姿は、だんだんと薄れているような気がします。特に、性差についてはこの傾向が強いと感じています。

私が教員になったころ、男の子は「君」づけ、女の子には「さん」づけで名前を呼んでいました。しかし、それはすぐに変わっていきました。平成に入ると、すべての児童に対し「さん」付けになりました。また、男の子から始まっていた名簿も、男女混合の名簿へと変わっていきました。この変更には合理性があり、ジェンダーの平等という観点からも進んでいきました。

しかし、「あるべき姿」についての価値観はそう簡単に変わるものではありませんでした。ご家庭においても、「男の子らしく」「女の子らしく」というしつけはまだ残っていると思います。あるいは、「お兄ちゃんだから」「お姉ちゃんだから」といって、多くのご家庭で使っているのではないのでしょうか。そうしているうちに、個人の趣向の部分にまで「あるべき姿」がずっと残っています。子どもたちが小さい頃の、青系と赤系の服装の違いは、わかりやすい例です。

しかし、身体的な性差は確かに存在します。しかし、その内面は様々です。よく、「普通」という言葉を用いますが、それは人数的に多数のことを指していることが多く、少ない人数の人は「普通ではない」のでしょうか。冒頭の「わたし」と「小鳥」と「鈴」は、それぞれは違います。しかし、それぞれに特徴があり、その特徴こそが大切だと詩の中ではうたっています。互いの「違い」を認め、受け入れ、尊重していくことこそ、これからの世の中には必要なことではないかと思います。今、カタールで開催されているサッカーの世界カップでも、その是非は置いておくとして、「人権尊重」を訴えている国がありました。

子どもは大人の影響を受けます。ですから、大人が確かな「人権感覚」を持ち、日ごろの発言や行動で子どもたちを育てていくことができれば、きっと子どもたちにも確かな「人権感覚」が育っていくと思います。そして、子どもたちが「自分らしく」育っていつてくれることを切に願うばかりです。